

第107回 銀座九丁目と有楽町0番地で 恋人たちが語りあつた時代

石原裕次郎の歌で最も売れたレコードといえば、牧村旬子とのデュエットソング『銀座の恋の物語』でしょう。カラオケが普及し始めた頃のスナックでは、オヤジ世代の会社上司が若い女子社員やお店のママとデュエットしている光景をよく目にしたものでした。

『銀座カンカン娘』『銀座の雀』『たそがれの銀座』などの名曲とともに、私がお気に入りに入りにしている銀座ソングがあります。高校生の頃に東京12チャンネル『なつかしの歌声』あたりの番組で知ることになった『銀座九丁目水の上』(詞・藤浦洗、曲・上原げんと)です(のちに『銀座九丁目は水の上』と改題)。

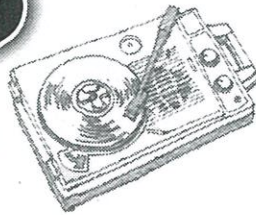
歌っていたのは神戸出身で藤山一郎を思わせる美声の持ち主としてコロムビアレコードが売り出した神戸一郎で、デビュー曲『十代の恋よきようなら』に続く第2弾でした。

発売された昭和33年5月といえば、長嶋茂雄が読売巨人軍のルーキーとして大活躍し始めた時期にあたり、

まだ銀座と新橋の間には川が横たわっていました。銀座周辺には京橋、数寄屋橋、三原橋など地名としての

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで



堀井六郎 松本浦 絵

橋の名前がいくつも残っていますが、銀座と新橋の橋渡しの役目を果たしていたのが土橋、難波橋、新橋で、下に流れていたのが汐留川でした。8丁目までしかない銀座の町割りですが、『銀座九丁目水の上』は、8丁目の先の水面に架空の「九丁目」を誕生させ、恋人と一緒に東京湾をめぐる船遊びで水上ロマンスを楽しみましよう、という趣旨の歌です。歌詞にはカクテル、マンハッタン、ハイボールなどの酒の名前やシャンデリア、デッキ、キャビンなどといった舶来語が並び、現在運航されている「東京湾クルーズ」を思わせるほど、当時としてはハイカラに作られています。

作詞した藤浦洗は戦前から多くのヒット曲を世に送り、戦後もデビュー当時の美空ひばりに『河童ブギウギ』『悲しき口笛』『東京キッド』などを提供した作詞家で、NHKテレビ『私の秘密』の名解答者のひとりとして、その風貌が広く知られるようになりました。『銀座九丁目』が発売された昭和33年

の同時期、東京五輪までに完成をめざしていた首都高を結ぶ高速道路下に「有楽フードセンター」(現「銀座インズ」)が誕生、私が小学生だった頃の日曜日には家族そろってフードセンターに出かけ、「九重」という店で釜飯を食べるのが何よりの楽しみでした。

同年10月に封切られた松竹映画『有楽町0番地』は、このフードセンターが舞台になっていて、あまり知られていませんが、同名の主題歌をフランク永井が歌っています。『有楽町で逢いましょう』の翌年のことでした。

「銀座九丁目」の汐留川は、やがて高速道路建設工事のため水路が埋められ、昭和36年になると、この高速道路下にも新名所「新橋センター」が誕生します。現在の「銀座ナイン」の前身で、今なら「銀座九丁目は高速の下」ということになりそうです。

令和2年に2回目の東京五輪を迎える現在の東京同様、オリンピックという大舞台の前に、東京という街が大きく姿を変えている時代でもあります。

